

「なじみ」になることから始める

グループホームの365日

認知症と
ともに生きる

199

Gakken Group

MCS メディカル・ケア・サービス

「愛の家グループホーム岐阜正法寺」

ホーム長・片岡恵美子
(岐阜市)



「愛の家グループホーム岐阜正法寺」の自室で懐かしい
写真を見ながらくつろぐ牧秀子さん

牧秀子さん(仮名)は、日付が覚えられないなどの物忘れが増えていましたが、後見人の手助けと地域のサービスを利用しながら1人で猫と生活していました。住んでいる賃貸住宅が取り壊されることになり、後見人と相談の上、当グループホームに入居となりました。

入居前に職員が牧さんの自宅に行き事業所の見学に誘うと、「猫がいるから」などの理由でかたくなに外出を拒みました。職員は牧さんの言動の裏に「知らない場所や人に対する不安」があるのではないかと考えました。別の利用者のケースでも、

日中短時間の滞在から始め、環境に慣れてから入居に至った方もいました。後見人と相談し、日中だけ事業所で過ごし夜は自宅に帰るという方法で、事業所や職員になじんでもらおうと計画しました。

牧さんは、最初は事業所で朝食を取ると「帰る」と言い、外出しようとしたり、送迎の車中で大声を出すこともありました。そんなときは途中の喫茶店で好きなものを食べてもらって

話を聞くなど、丁寧に対応しました。2週間後、経過を見て、牧さんが事業所の環境に慣れたのではと考えた職員が「きょうは泊まっていきませんか？」と誘うと、あっさりと承諾し、その夜から当事業所で生活を始めました。最初は不安な様子もありましたが、今は事業所に慣れて穏やかに生活しています。また、牧さんの猫は地域の保護団体が引き受けることになり、世話の心配もなくなりました。

認知症の方は慣れた環境から離れて新しい場所や人と関わることにストレスを感じ、混乱することがあります。その場合、気持ちを上手く表現できずに強い言動や行動として表出します。介護職が時間をかけて丁寧に対応することで信頼関係を築くことができ、新しい場所でも安心感を得られるようになります。

「愛の家グループホーム岐阜正法寺」では利用者の生活のすべてに気持ちを配っています。これからも生活を守り続けるケアを実施していきます。



「認知症とともに生きる グループホームの365日」は、月曜日に本紙くらし面で、火・日曜日に電子版で毎日連載しています。電子版を読むには「岐阜新聞Web」への会員登録が必要です。会員登録のページへは掲載の2次元コードから入ることができます。